

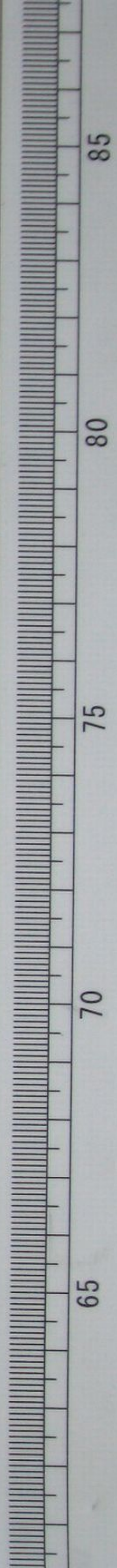
習書論童

全

文改六

不

特別  
イ 4  
3159  
B 26



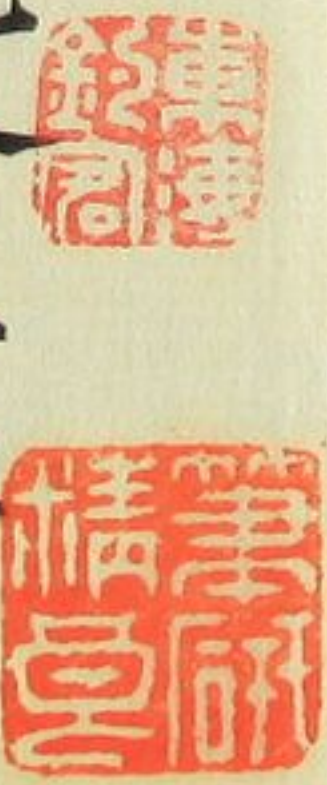


14  
3159  
B26



習書論童

常陸 治尻修平著



童子侍書習書を好む且篆刻を好む  
諸先生乃説を窺ふ亦まろくす七甚疑感  
とゆゆに何となく我 東方神代遊なり中古  
日本乃書といふ事 國字のおよあるもの如き  
その事とは此の事と書解といふ人  
筆様と稱し自先生の門を梅其字様美の



96  
風骨も空しくも國風は筆勢にあり  
死腕の如くは文字ありまに州書といひ後角  
終張をわは其といふは成執をいふは  
古人といふも其といふは又篆刻家といふ  
篆書乃沙汰もなき人印刻は修あり方  
細工に定用ありきといふは古印彫といふ  
書りて左法帖書といふあり流儀と唱へて其  
分つものなりといふは是なり也説わは詳に  
論のへと問答て曰予書癖なりと篆刻を

好み少くも深九事細井先生に學ひ四十年を  
経く猶ほ得あり書無心画あり枝葉といふも  
難きおとと知る論曰天生靈者百日即知其本  
ともわね其人といふは得危けんも予の輩  
至愚乃可及といふは且篆刻のありも抑末技  
なりともかばくお心なりこの画の書をわは  
得無は篆刻をももなきは篆刻書を第百とい  
彫刻は米元章曰画可摹書可臨而不可摹惟印  
不可偽作といふはを解あり墨本のありとを



96  
朱友仁曰非善雙鉤者不能得其妙精石判者不能形容其一二也如此乃其精密雙鉤判者乃巧拙より神を失ふことなりぬん侍  
傳りて教多自判りて家流はそまの彫刻  
いりも俗骨凡品より神氣を失ひたるものなり  
用ありたはれりし毎書評書説撰ありと  
いへとも先國字乃いりはと假名といひ今様を  
真名といひ右執筆單鉤を用ひて書べおと

高野大師もを草創といひと古く唱へるあり  
法もと丸太師乃書法も一能なりいり  
をまは書判を尊圓一品王なるれもまは  
法を失ふといふも余道も領守埋書法  
詩歌乃書法もと秘法ありと其家  
儀法門に入らるるの誦るる所師傳の  
華法乃雙鉤の閑達のみと云ふも  
心を函閑り述一修業なることなり朝に  
書を学ひ夕に一家は師とをを誦統を



傳遷之家一派の事は門をまじりて決る  
人々之を不謂為依なり趙公曰奴隸小夫朝  
學而夕誇其能薄俗可鄙耶とある  
本邦乃書法三筆三跡より傳る

但馬守

三筆

嵯峨帝

弘法大師

橘逸勢

三跡

小野道風

參議佐理

太納言行成

聖賢跡

弘法大師

小野道風

管家

世尊寺流

行成卿

行能

經朝

行尹

行俊

行房

行信

定信

上代流

紀貫之

中興の祖



尊圓流

青蓮院親王伏見院の皇子 開祖領正慈道子末御代  
等法に精一執中親王を傳西の法家流也

尊應親王

尊鎮親王

尊朝親王

尊純親王

皆御一流也

中ノ院

世尊寺ヨリ出

中ノ院ヨリ出

通村流

持明院

飛鳥井流

義政公

細川善法印

仁木伊賀守

二樂流

大内義隆

飛鳥井ヨリ出

宗梅

蓮歌師 宗祇之右筆

近衛流

關自信基公

信甫 信尹

号三頼院殿定家流ヨリ出

和久半左衛門

生田左門

古川兵助

三頼院殿御門人

光悦流

角倉与市

常信

觀世黑雪

大黒長左門

同御門人 二張即之法ヲ用

小島宗真



三教院殿御門人

智積院

松花堂 — 采圓

平野仲庵

加茂之社家

藤木里斐 — 武村志頭磨

入本道之家

井出正水 — 赤井得水

加州之人

尊田流ヨリ出

烏養流 — 楠長譜 — 三好長慶 — 松永貞徳

信長公之右筆

飛鳥井ヨリ出

堺流

連歌師 夢菴牡丹花

巻川親當

勅筆流

谷野新左衛門

勅筆流

宗祇

山崎 一流之祖

宗鑑

傳之記

石川丈山

榊原篁洲

尊園流

東厓

其進

衡山法

郡内 森島孫十郎

藤山之僧

隱元禪師

道儀之書

木菴

衡山法

即非

同法

悦山

同法

千泉

獨芳

獨湛

高泉



獨立  
雅宜山人法

武夫禪師あづか

長崎

華僧 宗福寺住 同

道本

董其昌法

雪機

林道榮

傳を志す

關東

一品公辨宮

日蓮夫

化龍公字

浩然

生言宗一人

佐木玄龍

同文山

谷内蔵助

堀部安房

朝鮮孟魯軒傳

義士之一

同 近衛流

松花堂

山路門 同

加藤玄平

赤垣源蔵

窪田宇郎

山路道輔

橘千蔭

佐玄龍法

八王子

長左門

茂八

傳内流

大橋流

本目流

玉置流

書札制札先生を祖る建部氏

友左夫

内藤武夫

馬場條次

寺澤流

素水

春水

董水

柏山

石川

以上傳を志す



獨立門人

高玄岱 — 頤空 — 龍空 — 雅空

男

頤門

同

陳白沙法

善法

大内忠美 白石法

伊東金藏

徂徠

熊耳

藍田

華傳徵明法

雪山

雪山門人

澤門

津田玄郎

同

重田善助

同

師岡理助

廣澤

古硯

秩山

南林

同

吉民

同

甲左友

啟空

此山

澤門

平林庄五郎

男

東之養子

桐江

東岳

鴻山

同

三井孫兵衛

男

孫八郎

湖門

同

龍湖

龍洲

小芝長雄

稻葉兵吉

同

冥源内

養子

源藏

樓之養子

忠藏

男

源吉

鳳岡

南樓

潢南

思亮

岡門

中川長四郎

同

伊藤善威

同 川崎

韓天壽

華岡

浅井忠良

廣澤男

細井

泉門

雲州

同

紫野

同

大和十衛

九皋

南海公

大川

素山



泉門 勝國寺 同 大和玄忠 同 目賀多宗 同 修平寺

印鼎 候山 如蘭 池亭

同 金川 淺見氏

彈坐

九泉男 勘衛 二男 孫左門 金之男 萱次郎 二男 祐進

大澤 金城 象水 竹園

泉門 治尾修平 男 大八 屋門八子 峯尾八右衛門 同 小島九八

電厓 玉塘 宝傳園 三圭

屋門川崎淺井聖七郎 同 越後橋井秀軒 同 小林玄昌 同 金子原菴

南浦 雪坐 雲溪 南岳

屋門 新井半平 同 上総河本圭藏

袞一 蘆間 青凹 霞溪

同八子 磯治常左門 同 麻布 天真寺 同 土浦 入江郷助 同 細井祐進

龜山 大雲 霞水 竹園

池永道雲 勝間氏

池一峰 龍水

始 佐玄龍門 松下嘉藏 石門

烏石 寂如上人 龍岡 竹岡

石門

河保壽



頤坐門

澤田氏男

東江 — 東里

江門

柴田氏同

高崎之入

— 汶類 — 賞谷真衛

年曆之不順官位之高卑  
請識者之選

尊圓親王より分流し今も公も凡百年来  
御書風専らな宗格を佐理行成卿も巧く  
後ら趙子昂を御学ひ遊ばしと趙公ハ  
羲之の跡を御と申す道一妙人上下

五百年縦横一萬里乃一人なりと胡汲中賞美  
せしなるたきも王に御書者人乃一脈と云は  
執法は御傳を不学た知るゆきよあは  
御書風一変起るは今もましく御書多人同  
後ら書記の書所より尊圓流し唱ふる  
なりぬ殿上人乃御風顔及ひもあきあき  
軽らまの侍ありこと可美の甚しきもあは  
趙魏公曰蘭亭是右軍得意書學之不己何患  
不道人耶と云ふ時流易趨古意難服と左傳の



書其單鈎法之唐韓方明子傳志一之  
收形也一之子志一之唐許老人の説を是  
美人の意を單鈎法のあらふも古師の草鈎を用ひた  
本邦乃高僧の之を録し立唐終ま二年書法ハ  
密法の録唯一を学ひたことならぬ録録も  
了らぬ別に一説もあり近年古法帖書と  
唱つたよのあり二王を書といふ書あり顔柳  
褚李世勝之陰景一口訣志傳之何人を  
祀ふことやん

嵯峨帝の書書豫州三島明神の顔乃の常州  
筑波山の顔奇妙を熱かるを

宸翰をとことおんを家の宗

但馬守楊逸勢其名をと渴望さるものを所  
唐澤老人九峯先生家の事を傳さることなり予  
門人藤本氏六筆の雙鈎を宗せらる歎哉  
堪似上本之家存其詩

五老峯が為筆洋瀾作硯池  
青天一張帝寫我腹中詩



此より大幅なるを相子とて懐赤祝枝山  
城のありたる國兵との中よりとて妙なるを

具平親王の書字は平尊院鳳皇堂の扉に  
上品中品下品は經文真筆を張く有り絶妙  
の極なる宗好筆乃錯雑ありと雙鉤と  
稱すありと書せりて人聞ふ出たきことあり

東叡山吉祥閣の額也

一品公辨宮御筆の有り奇妙なりと知し  
小野道風の駿州に居社葉の額觀圖の字

押得ん能はん事なり大坂天王寺額道風も  
ふとも有りしる志筆ハ花白勝なることあり  
筆者を詳よせ候

佐理卿の書こく百八字形と云ふと志筆と云く  
官侍あり見事あることあり兼に述一祝歌は  
為に失ふ

親帝聖人の書國札とて見事なるを

寂如上人鳥石乃法を流く見事なり  
義政の細川玄旨法印能く井流なることあり



大内義隆二樂流と云ふ事なり

北條氏政氏直公尊銘流なりと云事あり

甲斐信有公尊銘流なりと下江氏系圖の裏を

有る所く書かして然る凡筆なるぬらふ事

越後後信之れ書春日山の額涇潤して控の

心画と云ふ所の清字ありといふ也

鎌倉圓光寺瑞鹿山の額花園帝宸詔選佛場

祈禱夢窓國師浴室張即之洪鍾西潤和尚正安

三年北條貞時建まらんと皇帝萬歳重臣千秋

風調雨順國泰民安の大字其筆之云事なり

舍利塔門の額萬年山更利志義公の書云事

涇潤なるもの

建長寺巨福山の額穿一山天下禪林東海法窟

朝鮮人竹西の書山門の額興國建長禪寺西潤

禪師の書幅九天造ま土式尺楠の字ぬきなり

鐘之最明寺時頼の額なるもの

粟米菴の額高山大徹堂劉園溪の書なるもの

鐘の額之唐僧南源禪師印章二額を用ひ



その文



陽性印



陰南源

水府御林の中に者少辨敏基卿の墓ありとの

墓ありといふとさうり  
江の島山碑の文石といふ所も世人よく知る所をも  
文章磨滅二字をあたは家額の大名家といふ  
その文 大日本國江島

靈峽建寺山記

此の如くた者乃雲龍故古もいふ所なり  
宋と本ありとのありん

日蓮聖人の書に凡して妙といふ處一人  
辨題目といひ傳ふ者なり此の如く不止といふ  
勢ひ兵宋人黄山谷の如く聖人の氣辭持  
よく學ぶこと得加こもあたりなり親  
紙といふも四通をなす 總て題目の勢  
ありし妙

吉田兼好世尊寺流といふ見ゆなり



義教將軍乃和歌和州達摩寺とく會はる  
る

以不教くやや見のを川若くも是はと替  
わ賀おは君のみふはこす禮免

如形事達院御流俊おん見事あふよ  
萬里不路藤房卯玄解はよふ歌二首

雪んや一嵐又おきてふももそもあめ  
す海さく少稱のり海さ

海ふつたあし地り山と雪ぬりし都よ

と事ればはるる

香江州土津とく宮澤上木と然は是日已過と  
四文字と大相とく宮のあり諸君へまじりて  
おんまじりて先も事達院佛法かゝる

楠正行玄野若中流とく後醍醐天皇と本家の  
願一鑑取の一首

かたしとくとう稱くおりの梓弓子起  
救小入名をそとむ侍

以斯きり筆観精良なるはと見事か



此寺の禪家として修くを云ふは此寺の  
秩父慈光上人大般若經六百卷ありて六散  
しく半部ありて千年外のそのしく書寫  
坂上水多磨とて其の楷書又事しく本邦  
を其の師とすといふは其の金經は字と  
金經は仙とて外に寺ありて一散  
そのを三通と志と記たり寺の妙々

芝泉岳寺萬松山の額を閩道需經原  
書しく慶岩下萬年山青松寺の額も同筆

松字を奉字にかえたる寺青松寺の住持  
なりといふ同筆は如く京都泉涌寺の額  
宋の張勳之が需けるに泉涌乃二字斗  
寺の字後ら此寺と住持寺の字を仙と  
掛けるとなり仙もまたあるなり先  
に二千金贈  
ありて事あり

雲州南海公目録の不動の驪と云ふ大字の額  
其事なるものなり大衆の信あり



芝神四本お好菴の顔見事なり女  
美人をいへ

深州乃元改日蓮宗は比類なき僧と  
いふゆへ古筆帖ありて存せんとす  
奇品有りといへり  
河津実直の書あり

皇太后宮太子儀成

むさしーのりうーひのかもあひ  
うねーくみーのてーのてーのてー

此一風ある書一は  
一休和尚の書紫野大徳寺本像の顔  
何似の三字ありて長州清未彦臣  
液達民進物にて寄せたる文字なり  
世に及ぶべしといふ

実入圓喉驚不語

此の書一は凡筆をわたりて  
伊達正宗公の狂歌一首刻して花江  
本書あり



白玉の何そと人いふに

まじりてあはれなる也なり

如此の如く潤をあらく絶あるを御為の  
志なり

武州八王子南山田廣國寺に其基の毛利後

とく建久の山政大右の... 山門の境率山

の顔栲書... 見事なり 筆者志は

りし裏書もあふさや字一山... あり

惣門の顔禅林法窟朝鮮人なり鎌倉

建長寺の顔の顔せり

浅州観音仁王門の顔淺草寺壁より五丈も寸

横をえ守元保を平九月前天台... 良尚親王

書をりそのと後迄衛家熙仰ハ分書以

えりた趣き... 宇治の佛國寺ハ

家熙仰のハ分書見事なる銅碑あり

鄭成功七葉... 助新た帰る... 董法

和具... もなり... の文

道通大極先天外 心在光風霽月中



此行書とく妙なり雙魚とて銘板あり

大石由光也原物本唐國風書本垣淨光傳本  
玄龍法なりといふ也長尾之書なり刻之乳に

本門寺の顔安東一と稱いしものなりと人少

洛小鷹峯の女と笑き光悦町とく丹波法也

光悦寺とす法善寺といふ

角倉与市之本也孫光悦の人も嵯峨も復し

法中を書くと上なるといふ日漢流といふ

嵯峨帝乃御書法といふもあは世人多く誤る

幡山澗本坊松花堂近衛三貌院殿に存して

筆法と侍後天室海法の題一画法六揮画

まゝの書画とも不凡の妙趣向ありといふまゝ

俗者氏鄙んたりといふ也色を笑ふといふ并書

少くも

山路通輔或神主愚鉄慕和半と云駿州

考と書画もた松花堂の骨髓を得た

と云何人た学いた也

關東



黄蘗獨立禪人云夫々々々明の教を避東海の  
士夫を以て禪師と名不稱や雅宜山人王寵  
法とて草書をして能く

高古泰後玄岱と改獨立門とて書出の稱

高し浅き孰音施無畏の顔英在二

品川海晏寺の顔回筆なりとも金也

相州走水教音の顔華陀國之筆なり

回筆なり

頤堂家法を減せたり人々もいへば名を失ふ

その少くは廣澤の毛類多し

林道榮長崎の人彌羅山子書を能く京都

茅場所藥師堂り顔楷書なり孰知らぬ

長崎よりく二筆の一なり

石川丈山凹凸窠夫京都東山一條寺村の詩仙堂

あり諸顔分書一風のちや詩歌を上本して能く

遣懷

深癖愛山耽隱淪。雲松烟鳥石磷殉。  
由来慚愧遊城市。柳眼窺人花笑人。



賀茂河をわたりて都のこころ  
とてよみ侍りけり

わたりける浪えの心河に流るる  
老れ波るぬ影もたつ

六七四

吾乃其迄を予う遊人乃不我なすも  
武州野火留平林寺乃額皆夫山の多かり  
三州岡崎の海に泉村といふ乃産よく

都筑氏石川氏通家とて子孫今猶其家也  
予其子甘んじく志すなり

野州三利学校の聖像と新田岩松君画像  
して墨本は石室納めり題跋を水府の化龍  
公筆は清少章字よりて又事あるものあり  
幸の字は本邦一家なるゆへ清傳志は  
新井筑後守白石先生國丸書く又事也  
善法少くも用ひはるるゆへ  
藤木甲斐 清即位の如萬歳の旗と書家と



いづれに代、能書なりといひ淺字第六天は  
額田受の書といふ事ありあり、今も之に  
いづれに代なりや

貝原篤信も益軒の書法といふ事ありや  
改道説といふことありて、

澤菴和尚の書あり、體あり、大なりと云ふ  
事あり、善法を考といふ事あり

駿州原の白隱圓信の書といふ事あり、善法あり  
画もよく、いづれに代も淡墨を用ひ、佛の像なり

精密あり、いづれに代も知識とも見えぬ體を揮ひ  
出の事多し

朱霽水あり、前より御書といひし、善人といふ事あり  
人あり、いづれに代も、清河楠公の碑あり、事なり、正面の

ハ分書は、同筆といふ事あり、  
心越律師東尋と號あり、水南といふ事あり、

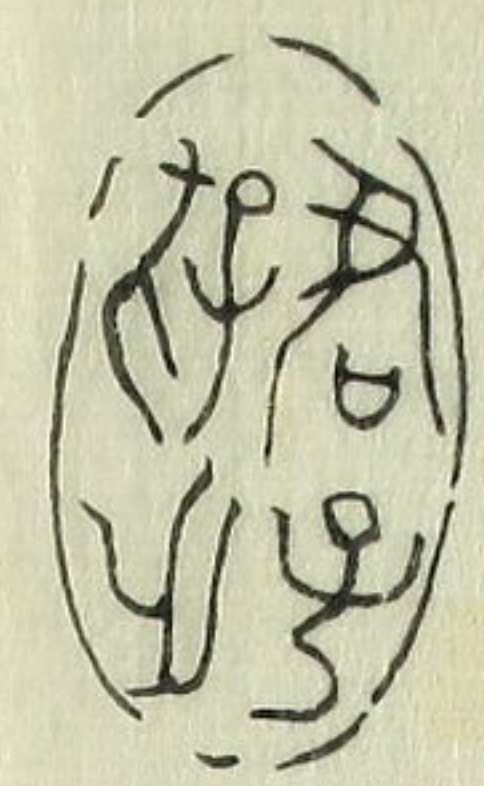
後園寺に在り、ハ分書といふ事あり、唐史推則を法といふ  
妙なり、印章を好む書、画も一法あり、ことあり  
此所、物来りあり、少くも、所、善なり、象、利も甚  
き事あり



予多き時禪師乃雙鉤書とて予を二見せしに  
予昂禮の行楷をく五絶一首を作る中及び  
かぶらひとて絶句一首を程師の  
か邦子といふ

雪嶽和尚長崎にありて雪山人をたするに  
の村面別に

君子存之



此印章を贈らばしとて

唐澤又傳とて

奇徳堂に陶師

袂園與市彌南海化後の儒友後流落して  
長崎の技藝に没せしり書は未法よりて  
終書なり詩は一時の秀するき絶句

二十餘年漂泊身妓園粘口未全負

世人若問我名性柳巷花外卧月人

以此一とたりしはありて

徂徠物先生明人陳白沙法の書を以てて

妙也此法を名く余も也多くありて白沙

王陽子者もく一法の書あり



田省吾柳澤庵居士著 往有甲州猿橋乃  
五奇祝の末七絶一首書たるを又其美法  
しく又事あり

大内志美 筆耳と稱し美法しく又事あり  
著し傳を志し

池一峯 道雲 善人黄道謙に美法を學ひ  
著述教多し其家流し門を出さず  
其ものまじあり 加えて其流親多し  
其流も其し

勝間龍水 道言の今も其書も其したる  
其流も其し

紀徳民 其流乃儒友書画を其美法  
しく又事あり

陶斎 卷泉州 堀乃其流も其美法  
画も其し其流も其し

三國 筆海 道水 宿の人 浅子 其流も其美法  
額 金龍山の三字一風あり 傳子志し



寶山和尚淨家此傳書と願書と名し画也  
石凡きり氣象乃傳と死にせんとしたる所  
細不経済の事とよし述はは起して未言と也  
云々弟と也

ありの世より死を目的なり  
うゝ多し人々をさしやほひす

此書と細書と扱ふことなる事なり

比野周平大雅と糸糸の人書画なる名なり  
而と志し次駿州吉原あり海より惡王子控現

山社に義提記と云碑あり楷書なり家願也

法皇の事と祖と出ると志し次惡王子と山願

鶴頸家とく産津の書なり

廣津公書への端禰天の額而龍由淺山

金龍山の額とるも祝と知る也

松下嘉茂島石山人楷書を歐陽詢行書文徳明

子と祝光明と自ら楷書なり善人なり此

法あり也

伊藤東庵滋明法と書也産津同字なり



陽其明長崎人華法の人篆書の字のありや  
男家名を減せ候と云ふ傳と志は成  
聖堂乃漸願絶妙の事と世人は知らず  
おの心を會し

身轉東禪寺海上禪林の願朝鮮人の書なり  
國は皆同一體なり

飯田方川雪山人を祖と云ふ人正謂叔書と  
りしの也

皆川文義湛園京師に在る書なり

華法の國風を用ひ何人を祖とせし也

江戸昔志といひし兼康祖の看板中の二字  
義士の一振部安法書なりと比未去龍と云ひ  
たらしし又事なり

伊藤善藏華園と稱ひ洋風なりと云ふ也

志和の木村筆善店古梅園願善主人の也  
臨法の事や傳を志す也

立志軒水府の儒友善本の製作九筆也



と修ふ書体をとらぬ

甲斐より南屏といふ異字生れりて唐朝の商といふ  
唐の書法といふ事といふ事といふ事といふ文を  
他といふ

伊勢の人の中川長四郎神天青初之筆風を  
後に毒帖を埋書し多の書ありて此の氣を  
風骨といふといふ事いふ古法に教ふといふ事  
ありて及ぶといふ及大に害あり

牛島弘福寺鏡牛神佛の宛基なりと書り

沙汰もたまに神佛ありとも牛。出。三。字。  
乃。額。起。向。ありて向らきとみなり。能。法。傳。授。  
ありやちまきや神佛の事といふ事といふ事

隈本後村徳友や牛島の書法といふ事  
書に牛島といふ事

日向の人を牛島といふ事  
牛島といふ事といふ事

市川といふ事といふ事  
牛島といふ事といふ事  
牛島といふ事といふ事



鎌倉清光あり本橋を所へ後帳を多く  
平林博信の父あり清光流の能書も多し  
古福帳を書きし清光を祖と云ふにた彦彦の  
書法もしく博信母を母と云ふにた彦彦の  
博信といふせよ家々物あり

降由文法書と云ふ師の師清光の流子駒形堂  
照常清光の師の師清光の流子駒形堂  
と云ふ事ありと云ふ法を三井龍湖と云ふ事あり  
又平風雲の師天壽の師清光の流子駒形堂

古法帳と稱し無数あり法を清光の流子駒形堂  
せし人あり其法今猶傳ふるその少なり  
彦彦の恩ありといひせよ

彦彦の師清光の師清光の流子駒形堂  
ありた書あり其門人に彦彦の傳をた加味し  
南強記を撰ひし彦彦を祖と云ふにた彦彦の

筆士あり

白河彦彦長尾元長本流と稱し武夫と云ふ  
文筆を好み彦彦の師清光の流子駒形堂



教多きを宗又妙心此の傳は傳來して澄泥硯  
作すありき

陸其年著き如好く米法を由りて  
其病晩年より病ひとく不止ぬ戸塚驛乃

富塚四神に掛きて神樂殿より頭を書  
たし法を學ばしは後者如安ひを恥つ

此卷の畫の事を載せしは下卷の卷末  
源實朝の如畫紺帝金泥の十六羅漢小幅

なる有るを凡そ如くを文字もさす

家一もなる

米元章の遺蹟五言律一首諸卷に均す  
有るは其詩

携乃琴遠送沙 抱筆弄書寫

杜若幽庭州 芙蓉出沼後

寫迹來野家 形勝得山家

往々留像步 登塔日易斜

明乃律霖の共迹唐詩五律一首大幡廣尾

祥雲寺の什物足事なるものあり



黄山谷の詩送諸彦其物類なるを控刻  
家範の

文衛山より作七絶十二首其送彦八王子  
実作(回)物類なるを控刻之類

此小松拳の山居の詩予の親筆を録  
音(山)の傳(の)

國字

通	躑	燈	籃	桤	椋	倂
アツク 天晴也	シツケ 習禮也	ヒシムシ 燈織也	サ 籠	モミヂ 桤	シ 椋	ラモ 倂
鑪	脛	錠	菟	栳	杻	働
ジン 或佐頭	ウツケ 馬人詞	シカト 定辞	トコロ 藪也	モミチ 栳	コマイ 杻	ハタ 働
鈕	臆	禪	統	柶	榭	凧
ハッキ 刀飾	ヤカテ 猶薛	チハヤ 要巖	クダシ 勞倦	コマイ 柶	サカキ 榭	ユガ 凧
銳	辻	錠	叔	畑	柶	凧
同上 作銳	ツヂ 街也	チウ 猶命也	モミ 穀也	ハタ 一作畚	トガ 柶	ナギ 凧
銳	辻	釋	糶	畠	檉	峠
ニヒ 銳文	コム 猶入也	タスキ 擧袈	カウシ 麩也	ハタケ 陸田	カシ 檉	トウ 峠
鎧	辻	颯	咆	哥	枉	晶
ヤリ 鎧也	トテモ 設面 又希望	チロフ 子ロフ 窺敵也	アヒ 石決明也	ノ 希帛	マサ 枉	サヤ 晶



鳴	鯽	鯢	鯪	問
シキ 鳥	エソ 魚	イサハ 魚	ハエ	ツカエル 大不得 入松
鴛	鯽	鯢	鯪	靱
カニ 鳥	アサハ 魚	コシロ 魚	並同	トモ 在臂 避賢
鶺鴒	鯽	鯢	鯪	鯢
キク 鳥	ウグイ 魚	ウグイ 魚	大口魚	ラカ 用腹赤 ニ字
鶺鴒	鯽	鯢	鯪	鯢
イカルカ 班鳥	コチ	カウ 鯢	ドチヤウ 泥鯢	ナマズ 鯢魚
鷹	鯽	鯢	鯪	鯢
ニ合字	チドリ	マテ 鯢	カス 鯢	イハシ 鯢
鴿	鯽	鯢	鯪	鯢
同上	シイラ	アミ 鯢	モ 同大	ハユ 鯢

古俗命男子曰某麻呂猶漢人曰某甫曰某兒也鷹又用九字

本朝省文

覆	籬	業	從	困	屐	俯	本
フホウ 覆	シ 籬	ゲウ 業	トク 從	カコム 困	シ 屐	フス 俯	本
席	縣	斂	憲	田	命	俊	朝
ロク 席	アカタ 縣	コラス 斂	ケリ 憲	マロシ 田	メイ 命	シエン 俊	朝
遠	聖	漢	怨	報	矣	々	省
タカウ 遠	サイ 聖	カン 漢	ユレ 怨	ホウ 報	ケイ 矣	イッル 々	文
ア	曰	溝	服	崎	只	坐	
ホウ 部	ウス 曰	ミナ 溝	フク 服	サキ 崎	シテ 只	チリ 坐	
叙	澁	条	条	亥	啖	左	
シヤク 叙	シツ 澁	テウ 条	テウ 条	カン 亥	シハ 啖	チリ 左	
沢	猿	条	条	元	囊	日	
タク 沢	サル 猿	カク 条	カク 条	キ 元	フシロ 囊	メ 日	



閔 ミダキ  
聞 ミキ 陵 リョウ

夕 シヤバ 佛氏 娑婆ニ合省字 苜 ホサツ 苜 サツタ 苜 エシカク

譌字

丑 ウシ 丑 ウシ 羞 カウ 修 シユ 窪 クホシ 會 クワイ 苻 カク

判 ハン 判 ハン 近 キン 迺 ノウ 邱 ク 舛 マシ 邱 ク

叡 エイ 叡 エイ 菌 キン 坤 クン 墀 チ 堰 エン 壺 コ

宥 ウ 宥 ウ 宴 エン 肩 ケン 尻 シ 屐 キ 宥 ウ

歧 キ 席 シキ 染 セン 旌 セイ 戈 カ 乖 クワイ

旅 リョ 惣 ソウ 籓 ハン 柎 フ 檣 カウ 檣 カウ

築 チキ 様 ヤナ 貯 チ 祭 サイ

有通風の文字二を卷く童蒙抄後

東船の書と流ふものにも東船と南船

たしりよ急札もある 全書に書は向ふ

一禮交り易れ書より達原ゆはも文筆の



無<sup>レ</sup>先<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>中<sup>レ</sup>集<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>雅<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>と  
し<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>少<sup>レ</sup>友<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>味<sup>レ</sup>の  
文<sup>レ</sup>房<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>方<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>斗<sup>レ</sup>た<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>交  
易<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>海<sup>レ</sup>外<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>飾<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>之<sup>レ</sup>雅<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>と  
又<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>屏<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>唐<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>は  
其<sup>レ</sup>店<sup>レ</sup>に<sup>レ</sup>飾<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>向<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>主<sup>レ</sup>人<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>雅<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>し  
志<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>生<sup>レ</sup>儀<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>辨<sup>レ</sup>別<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>か<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>和<sup>レ</sup>漢<sup>レ</sup>  
事<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>同<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>事<sup>レ</sup>あり<sup>レ</sup>康<sup>レ</sup>熙<sup>レ</sup>乾<sup>レ</sup>隆<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>貴<sup>レ</sup>姓<sup>レ</sup>  
人<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>宋<sup>レ</sup>元<sup>レ</sup>明<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>高<sup>レ</sup>妙<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>たり<sup>レ</sup>ま<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>風<sup>レ</sup>感<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>筆<sup>レ</sup>道<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>お<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>  
と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>俗<sup>レ</sup>身<sup>レ</sup>凡<sup>レ</sup>品<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>多<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>筆<sup>レ</sup>来<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>乃  
書<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>妙<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>趙<sup>レ</sup>公<sup>レ</sup>曰<sup>レ</sup>結<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>因<sup>レ</sup>時<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>用  
筆<sup>レ</sup>千<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>易<sup>レ</sup>右<sup>レ</sup>軍<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>勢<sup>レ</sup>古<sup>レ</sup>法<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>變<sup>レ</sup>其<sup>レ</sup>雄<sup>レ</sup>秀<sup>レ</sup>之  
氣<sup>レ</sup>出<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>天<sup>レ</sup>然<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>字<sup>レ</sup>形<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も  
知<sup>レ</sup>る<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>妙<sup>レ</sup>在<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>筆<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>筆<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>執<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>し<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>第<sup>レ</sup>一<sup>レ</sup>  
也<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>傳<sup>レ</sup>よ<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>て<sup>レ</sup>奴<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>墨<sup>レ</sup>猪<sup>レ</sup>死<sup>レ</sup>蛇<sup>レ</sup>枯<sup>レ</sup>棠<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>  
四<sup>レ</sup>物<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>流<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>悲<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>い<sup>レ</sup>つ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>者<sup>レ</sup>書<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>好<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>く



邪山を擇ひて其の所を巻立綱程陽春を  
中華の言記様とて本邦の御文章向きなり  
顔法より出く依體なり者筆を古法といひ  
義獻より出く一脈子昂微明古法なり董  
其の筆法よく雲霧を傳ふところ氣韻の變  
化を可と推後る者も得ぬ下唐宋元明と  
詩文の調り違ふも知る處一字一画長短を  
考ふとたは所謂奴書とて死物なりと  
貞享元禄の流三韓の法も傳來せし

名家あり三韓ハ宋ハ張即之趙子昂を祀る  
志ふも多く是即之と南の故に苦樂怒張と  
筆力を元禄の松雪山人文衡山の法を余は徳  
こふ美人より傳ふ俞氏商人の所は筆の  
君子なり山人唐厚翁は口授を以て正脈を  
傳ふ山人を肥後然中唐の侍醫とて湯明  
學者なり詩文章もあはれ如く友を以て  
東遊して奇人の悦少くは唐厚翁山人の書傳  
成就して後六書に通達一熟著ありて



臨済の撰書を一洗んとの上多技の老翁を  
文筆斗よあ所躰御教も考達あつこし  
あ東正面墨本兵紀藩儒友柳東皇別傳  
探りゆく晦菴朱文公の古蹟周易大序九十餘字  
自刻して墨帖を入

天覧近衛殿下より原松墨本晦菴真跡より  
題辭を賜て其後石字よりそのを造ると同く  
奉る其文字維南獻壽といふ四字なり御賞集  
賜る御文字字様奇勝

睿感不斜と御奉書よりかをも用ひて奇珠堂の  
跡今にもよく存る晚年に壽文不載酒といふ  
書を著述し  
御府へ獻以こふも篆文の讀みかこきを  
あつたあはれやまきここの本より墨字のなほ  
なきあつたりし廣澤をよ奉り一人といふ  
志るを書付をも夢想のやうにあはれ長崎に  
生年や一筆筆師のこはを離したる畫本を  
たまたまよくあめも可得ややの魏鍾絲



八十の初と神の八の初と禪の羊頭を  
かけと狗肉を粥こいふ類の徒少くは偏に奴書  
南路の病を云々事あり惟書之不同可庶  
幾也こいふも奴書ときいふいふなり天代の才を  
いふもあふ所書本をぬり是へ滑りて  
自ら誇るは上知下愚なる所童蒙の心を  
いふも板に車をおんぬくはたんをいふ  
如<sub>い</sub>沛急流盡力不離所處と云々如と車や  
あふ所のなるは初学先  
大書不得從小意前筆後勝意後筆前敗  
善筆力者多骨不善筆力者多肉こいひて  
筋書墨猪の二途も執筆より起るなり  
王元美曰腕中有兔眼中有書こいふも童蒙  
心滑るなりこいふも運筆の目ゆたなりて  
飛鳥驚蛇躍潛龍の勢いもいふなり古人の  
論書に合さざるなり此等家毫端  
あふは字の飛動変化は書ののりたるに



ふりて道意の文をば揮ひし  
物もたすむ或あり備ふよき也  
譬を以赤穂義士乃降と物類をよ  
心画のまふとけいさくをよ安せ及山林の  
高士終身お楽乃技藝を名利  
閑達を看よよのちくもや好之者不  
如樂之者と森愠四可也差別筆硯  
美忌乃別玉松の妙具眼の人まつ也  
對州乃人内山某は誤り雪山人の書と  
朝鮮人なり親せしん甚賞美しと仙人の  
書ちよんこいひとなるも又長崎の神事  
万度と書たるあり系船人のひゆるふを  
湯中ををあり此筆を九年先にも記せり  
舌友清川氏も誤りなき棄らん系船人悉く  
眼力ありて親ののたあるも所文章の士  
名第しく末也て具眼のそのの親也たる  
ちよん一系大書を信ふといふ毎ふなる  
非志士高人詎可與言要妙也といふも可也



又達于其源者少闇于其理者多又時流  
易趨古意難復となり雪山人廣澤翁  
九事先せけこりみかく執法連綿と氣象筆跡  
標我こしてこと也 本邦の身身もたゞし  
親く廣澤老人に學ひ名を傳たる人々  
死能善猪杖葉如書の病とまぬらた  
名利趨る徒少とまらず 本邦の書の何れを  
書し知る人々の書いらはを書も善く  
三編之其國に存在す謂ひ画り然妙  
得く實したる也 傳もたまき人々と  
和漢と法を別しし得正書は文字の社と  
おほく不學してふ付家書を等閑とす人  
至利本も奇文ある人々を驚きす不  
ともはかこき料書いらのあらはめたらぬこと  
笑へ黄卷の傳出る心翻譯師なし 後抄  
の事多きものを知らず蓋山の傳を  
傳本もなく深き志保もたらず次道儀乃  
もふ書いらを傳いらぬことのおほく筆考



中華の猷毛（り）をたかめしや若斗の  
録と本邦乃毛（く）埋畢（一）忘れを徒と  
魚魯不辭（故）拳（海）の次文字（一）征（魯）乃  
ゆゑしよと知るもまに生涯播而  
終るもゆゑ可歎事（一）ゆゑ彫（器）の技  
あましも我（一）好む所たはた終身の榮華  
何と俗と求むゆげん大業の君子書は  
姓名を記ふはふといふ予（一）知（一）不（一）  
あふお書の童子執法なく終身学ふ

何の益あはし終るも書（一）の好（一）を  
の謹（一）て古人乃（一）説（一）をなみとあはし  
好事の君子先賢を欽慕（一）千古を好尚  
まはすは責賤（一）を志（一）一也（一）豈可（一）陷（一）邪  
路（一）也（一）下学而上達（一）雖小道必有可觀者焉

附

家刻の事を略記別（一）秘傳（一）と  
おもはるべきなり御（一）も先（一）家書（一）を



そのし海く彫刻をいへ印刀を運ば  
うと心のまゝに運筆の如く自在に  
鐵筆ともいふ處に志を以て書書の運筆  
とも志を以て自ら才を以て奇工を用ひ  
若用は小刀細工を以て彫刻を以て  
誇るるを市申乃印判師と同す之端を  
其ゆへを以て宋漢印の彫を以て誇るるを  
先づ宋肉の如くみくちを以て用ひて後世を  
驚一徹者の志を以て志の如く安とす

唐文を以て祖來先生は一筆の印譜の跋に  
三代邈矣秦漢不多見之亦近証自宋宣  
和下と書きたる言はる言を以て一  
ありしを以て用ひたる彫刻ハ張秋潤戲鐵  
十二刀法なるの類なる中身もく妓女  
娼婦戲場のもの艶を以て用ひる  
本邦印ありや文人知識の印章ハ志を以  
黃峯山の僧徒の印章水府心裁印師長崎  
近本雪梅印師の類を以て宋元明の



印章 何事も刻法勁健玩味して可也  
 心裁 師より重法たるに免けたる少  
 甚 水府義公の御用の中におらぬ事  
 しく 然園寺に任せしと承る傳ふ  
 師故 九条先士の流る

明人 王一元の刻り多客  
 鑑石の梅鈕をに見る  
 子母より立元諸君は  
 好せあり任せ捧るなり



心遊 青山 流水

明人 何雪漁の刻り 蜜鑑石乃白文あり  
 印章 六顆諸君は珍苑



酒中 仙



竹窓



十千 沽酒



謹封



卧月



卜居 名山

如此なること予幸いに熟を親て学ひ刻法先師  
 仕事のこと 眞風を紹きしと熟を親  
 法を用ひしれ あり  
 英一徳の流る 銅印妙なる



趣在 山雲泉 后間



書法を統の明察銅印



蘿月  
山房

是をも法として好まぬ也

篆刻にその本心より力を運らんとすべく  
自在なるべし(釋)は意化ありて細工に  
あつた鐵筆こころの本意を可成りたす  
唐澤家の主人は法永道謙といふ篆法の  
達人あり清和の人黃道謙は信東といふ  
篆書に二心をあつて篆刻も好なり  
一万萬象千文といふ篆刻は奇妙なり

出来や當村の名家序跋を以て今人は法  
を用心するべし(釋)轉密なる法は  
その心得ありてあつたは篆刻は  
篆書の數に於てあつたは別な多端の  
法もある事なり(釋)あつたは  
あつたは篆法はあつたは傳は遠に花  
なり(釋)あつたは傳は遠に花

山房

書法を統の明察銅印



石嵩生寫



○傳よるまと言

書ハ寧ろ拙るゝも巧もゝ母ハ

寧ろ醜ありと媚あり母也

寧ろ支離ありと軽滑あり母れ

寧ろ真率ありと安拙あり母ハ

又云く、かゝる榮祿の書と云ひ三十手を教り

俗氣を洗除しと尽きず俗書を齧きんと欲する

ハ唯仙壇記のみと



夫斲輪以斧不言揮運之方解牛用刀難傳經首  
之會固知繪圖執筆古之陳迹書之糟粕也

(書法通解卷二)





